

# SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

## くたばれ！ハリウッド

配給/アミューズピクチャーズ

2003 (平成15) 年8月19日鑑賞

<東宝試写室>

Data

監督・製作：ブレット・モーゲン&  
ナネット・パースタイン

出演：ロバート・エヴァンズ/ジャック・ニコルソン/ダスティン・ホフマン/フランシス・フォード・コッポラ/ロマン・ポランスキー/アリ・マッグロー

### 👁️👁️ みどころ

1970年『ある愛の詩』、1972年『ゴッドファーザー』を製作し、斜陽のパラマウント映画を建て直したカリスマ・プロデューサー、ロバート・エヴァンズ。この映画はそんな彼の栄光と挫折を描き、そして今も現役第一線で働いている実像を描く自叙伝映画。自叙伝とはあまりいい趣味とは思えないが、「誰でも仕事をしているけどそれを楽しんでいる人はとても少ない。私は心から楽しんでいる。だから価値がある。」との言葉には同感。

#### <カリスマ・プロデューサーによる自叙伝映画のプロデュース>

ロバート・エヴァンズは1930年6月29日、ニューヨークに生まれた。1957年の『千の顔を持つ男』などで俳優として活動した後、プロデューサーとしての才能に目覚め、1968年以降、『ローズマリーの赤ちゃん』、『おかしな二人』、『ロミオとジュリエット』、『さよならコロンバス』などで、ヒット作を連発。

そして、1970年の『ある愛の詩』が大ヒットし、主演女優のアリ・マッグローと結ばれた。アラン・ドロンの仲介で引き受けてもらったといわれている、フランシス・レイが作ったあの美しいテーマ曲のピアノの旋律は、今でもよく覚えている。またあのラブストーリーを一躍有名にした、「愛とは決して後悔しないこと」という泣かせるセリフも、実にピッタリと決まっていた。

さらに、1972年のアカデミー最優秀作品賞等を受賞した『ゴッドファーザー』も彼のプロデュース。もっともこの映画の監督にエヴァンズが大抜擢したフランシス・フォード・コッポラとはいつもケンカしている因縁の中。この映画のテーマ曲「ゴッドファーザー

一愛のテーマ」は全世界的に大ヒットし、日本では尾崎紀世彦が日本語で重厚に歌いあげた。ところがエヴァンズはこの映画の製作にも没頭したため、愛妻のアリを『ゲッタウェイ』で共演した大スター、スティーブ・マックイーンに奪われてしまった。

### <割り切りの早さと勤の良さ、そしてエヴァンズ語録>

この映画で描かれているように、エヴァンズの割り切りの早さと勝負勘には独特のものがあつたようだ。従って彼の行動は素早い。しかも彼の発言には特徴があり、分かりやすい。

「危険じゃないかって？当然、だからそそられるのだ。」

「後退するぐらいなら破滅したほうがいい。」

「計画なんてするな。計画なんて貧乏人がすることだ。」

等のいわば、「エヴァンズ語録」はその典型。

もともと、最初の妻シャロン・ヒューゲニー以後、離婚と再婚を繰り返し、6番目の妻まで迎えたエヴァンズも、所詮「女心」は読めなかったよう。アリ・マッグローへの口説き文句、「その男と別れたら電話をくれ。俺は7桁ダイヤルをすれば届くところにいる」は功を奏さなかった。従ってエヴァンズ語録の、「女の心がよめるなどという男は何もわかつちやいない」には説得力がある・・・。

### <何ともすごい人脈>

エヴァンズは栄光の時代と挫折の時代を経て、再びパラマウント映画に戻り、70才を超えた今も映画のプロデューサーを続けている。このような波瀾の人生を送りながら、浮き沈みの激しい映画界で35年間も現役活動を続けることができたのは、エヴァンズの人脈の広さによるものだ。数ある美人女優との「浮き名」は当然のこととして、ニクソン大統領の大統領補佐官をつとめたヘンリー・キッシンジャーをはじめ、アラン・ドロンや、ケーリー・グラントなどの名だたる俳優との親交も深い。さらに社交界や裏社会に通じる伝説的弁護士であるシドニー・コーシャックのお世話にもなっていたとのこと。これらはエヴァンズが、他人から「認めてもらう能力」を持っていることのあらわれだ。

他方、エヴァンズは「人を認める能力」も抜群。彼が見出した俳優の代表は何といつてもジャック・ニコルソンとダスティン・ホフマン。さらに2003年、あの『戦場のピアニスト』で、アカデミー監督賞を獲得したロマン・ポランスキー監督もエヴァンズが見出し、アメリカで庇護した監督だ。

何ともすごい人脈。その人脈一覧表を見れば、それだけで圧倒されてしまう。

### <エヴァンズのその後の作品そして、最近の作品は？>

エヴァンズは『ゴッドファーザー』でアカデミー最優秀作品賞を手にした後、自分の製

作会社を持ち、1974年の『チャイナタウン』でもアカデミー脚本賞を受賞した。これはジャック・ニコルソンが主演し、ロマン・ポランスキーが監督した作品。

しかし1975年以降、エヴァンズはドラッグにはまり、1980年にはコカイン所持の罪で有罪判決。エヴァンズにとって最悪の時代となった。そんな中、編集の指揮権をめぐって Coppola 監督と訴訟ざたになった『コットンクラブ』（1983年）を制作したが、これは興業的にも失敗。

エヴァンズの1980年代はこのようにトラブル続きの時期だった。しかし、1990年以後は次第に復活し、1990年の『黄昏のチャイナタウン』、1993年の『硝子の塔』、1997年の『セイント』は大ヒットだ。そして2003年の今年、『10日間で男を上手にフル方法』が、今日本でも上映中だ。

これは是非観なくては・・・。

自叙伝映画とはあまりいい趣味とは思えないものの、これだけ語る内容の多い人生を送ってきた人なら・・・と納得。

2003（平成15）年8月19日記